

「キャリア形成支援の教育臨床学」の授業改善に向けた諸課題

教育学・尾川満宏

### 1. 授業の基本情報・概要

本報告書でとりあげる「キャリア形成支援の教育臨床学」は、教育学専修の専門教育科目である。開講時期は2回生前期であるが、専修内外から2~4回生20名が履修登録を行った。

本授業は、主に中等教育段階を中心としたキャリア教育や、学校内外における若者向けキャリア形成支援事業の現状、それらを方向付けている今日の若者政策などを扱うものであった。授業序盤は、日本における進路問題や就職問題の歴史や現状を、中盤は、現代社会におけるキャリア形成の困難について多面的に概説・考察した。終盤では、以上の講義内容をふまえてキャリア形成支援実践プログラムの開発を行った。

以下、本授業の振り返りを行うとともに、今後の授業改善に向けた課題を抽出する。

### 2. 授業評価・授業研究の内容

本授業では、授業の内容等に関する学生向けアンケートを、期末レポートとともに提出してもらった。このアンケートは、授業の受講を通じて、授業目標がどの程度達成されたかを学生自身の評価から把握しようとするものである。無論、個々の受講者による授業目標の達成度は期末レポート等で評価をしている。しかし、期末レポート評価ではアチーブメント測定が中心になってしまい、学生の意識変容などを把握することが難しい。そこで、上記アンケートを実施することで、本授業のねらいがどの程度達成できたかを多面的に把握することを目指した。結果を図1に示す。

総じて、受講者自身は授業内容に対する理解や関心が高まったと感じている、ととらえて差し支えないだろう。受講者のほとんどが学校教員志望者であることを考慮すると、「学校におけるキャリア教育の考え方や意義について、理解できた」かどうかは重要である。この項目には、約6割の学生が「あてはまる」、約3割の学生が「ややあてはまる」と回答

している。必ずしも十分な数値ではないかもしれないが、もっとも重要な項目において評価が高かったことは一定程度評価できよう。

ただし、本授業は履修登録者が20名（最終的な期末レポート提出者は18名）という比較的小規模な授業であった。であれば、すべての項目において「あてはまる」への回答をさらに増加させることが求められよう。とくに、学生にもっとも関心を寄せてほしく、かつもっとも取り組むべき課題である「学校におけるキャリア教育の課題や問題点について、考察できた」において「あてはまる」を選択した学生が20%強というのは、十分な数値とはいえない。「子ども・若者に対する学校内あるいは学校外でのキャリア形成支援について、関心が高まった」に「あてはまる」と回答した学生が多数であることから、次回以降では関心の高まりを実際の実践上の課題や問題に対する具体的な考察につなげていく工夫が必要である。幸い、平成27年度愛媛大学教育附属小学校の研究大会において、「キャリア（総合的な学習の時間）」を公開授業として参観することができた。そうした経験から、次回以降の授業では実際にキャリアをテーマとした授業の指導案や学校現場でのキャリア教育実践事例を題材とした教材を準備してみたい。授業内容に占める実践的な内容の割合を現状よりも高めることで、より具体的な理解や考察、論述を引き出すことができるだろう。

終盤のキャリア形成支援プログラム開発では、学校・学年段階等を受講者が任意に設定し、グループで実践プログラムを構想・発表した。しかしながら、多くの受講者の関心が小学校教育ないし小学校教諭の教育活動にあることから、授業で扱った中等教育以上の内容とやや齟齬が見受けられた。その結果、プログラム開発に授業内容が十分反映されないケースが生じるなど、次回以降に改善を要する点が認められた。

このことから、次期以降、中等教育段階以降の若者のキャリア問題を扱いつつ、初等教

育段階でのキャリア教育との接続をふまえて、より包括的なキャリア教育論、キャリア形成支援論として授業を展開する必要がある。

加えて、自由記述欄に「2回生には、指導案作りがなれていない部分もあり、ハードルが高かった」との記述があった（文末参照）。今回の受講者構成は、4回生1名を除くと2回生と3回生がほぼ半数ずつであった。3回生が参加したグループと2回生のみで構成されたグループにおいては、実践プログラム開発の方法や成果にばらつきがあることが確認された。さらに、本授業は前期に開講されたため、3回生といえども教育実習実施前であり、必ずしも指導案作成に慣れているとはいえない段階にあった。平成28年度以降、受講者のほとんどが2回生となることが予想されるが、学年段階に配慮した適切な課題（課題提示のあり方を含む）を検討していく必要がある。

### 3. 「授業時間外学習の促進」について

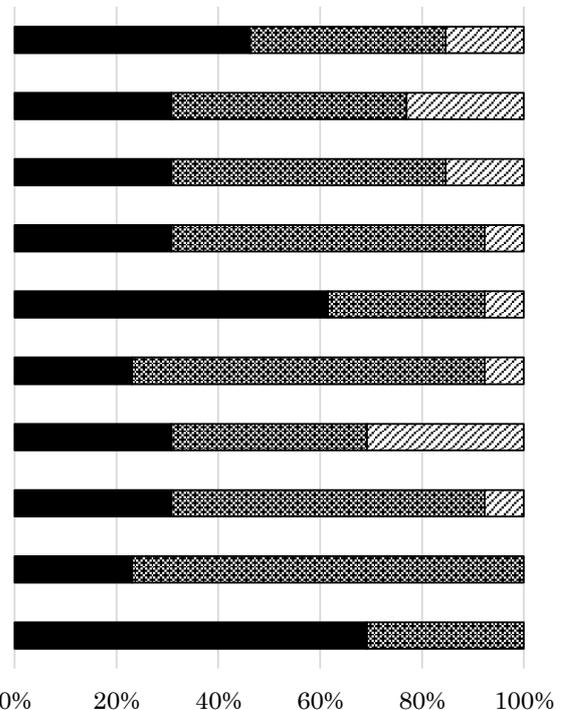
本授業において受講者の授業時間外学習をどの程度促進できたかについては、教育コーディネーターを主体として毎学期末に実施される「平成27年度前期ディプロマポリシー（DP）対応調査」によって把握しようと試み

た。しかしながら、本授業においては受講者からの回答協力が極端に少なく、信頼性に耐えない集計結果となってしまった（回答協力者は5名）。これは、授業担当者が授業内で回答時間を確保せず、授業最終回に書面にて回答協力を依頼したのみだったことに起因すると考えられる。着任初年度最初の授業の「DP対応調査」であり、授業担当者が調査実施の勝手を理解していなかったため、調査協力を十分得られなかった。授業時間内に回答することが適切かどうかも含めて、今後適当な調査実施方法を検討する。

以上のように検証に耐えうるデータを収集できなかったことを前提に、授業担当者自身の省察として、受講者の授業時間外学習に関する成果と課題を以下に述べておきたい。

まずは、不定期に実施したレポート課題に関する成果と課題についてである。第9回の授業「大人になるとはどういうことか」では、ジェンダーや地域性など様々な条件下で「大人になる」ことの要件が異なる状況を事例とともに解説したうえで、人々のキャリア形成の多様性を学校はどう引き受けることが可能かを考察した。そのうえで、すべての人々のすべてのキャリアを肯定できないにもかかわらず

現代社会における子ども・若者の「学校から社会への移行」が、社会問題・教育問題となっていることを理解できた  
 現代社会における子ども・若者の「学校から社会への移行」にかんする諸問題について、その社会的背景を理解できた  
 子ども・若者のキャリア発達・キャリア形成にかんする意識や行動について、理解できた  
 子ども・若者のキャリア発達・キャリア形成にかんする一般的な見方に対して、批判的に考察できた  
 学校におけるキャリア教育の考え方や意義について、理解できた  
 学校におけるキャリア教育の課題や問題点について、考察できた  
 子ども・若者に対する学校内あるいは学校外でのキャリア形成支援について、具体的に実践を構想できた  
 自身の考えを深めたり修正したり整理したことについて、論述できた  
 自身の考えを表現しながら、他者と議論したり協働したりできた  
 子ども・若者に対する学校内あるいは学校外でのキャリア形成支援について、関心が高まった



■あてはまる ■ややあてはまる ▨あまりあてはまらない □あてはまらない

図1 授業を振り返って

らず、すべての子ども・若者のキャリア形成に介入しなければならない学校教育の現状を「アポリア」概念を用いて考察した。この授業後に「授業の最後で言及した『アポリア』について、具体的にどういうものかを自分なりに考え、整理し、教師としてこの『アポリア』に向き合う際の課題や留意点を述べなさい」との中間レポートを課した。

レポート評価において、文献等を参照しながら学校教育が孕む構造的な難点を整理したうえで教師の役割を規定しようとする記述が少数確認された。これらの提出者においては、授業で示した視点をふまえて、授業時間外の文献収集・講読により考察を深めたことが認められた。しかしながら、自身の思考に対する省察が不足しているレポートが少なくなく、授業で示した批判的考察の要点を十分理解していないと思しきレポートも見受けられた。このレポート課題では、考察テーマは授業内で示したが、意見や見方の葛藤状況は受講者自身に整理してもらうことを意図していたため、授業者はそれらを明示しなかった。ところが、結果的には、議論が抽象的であったり、支配的言説を盲目的に繰り返したりするレポートが多く現れた。受講者の思考を揺さぶるための授業構成やレポート課題のあり方について、再検討する必要性を認識した。

次に、授業終盤のキャリア形成支援実践プログラム開発に関わる授業時間外学習の課題についてである。この活動では、授業時間内でも準備時間を確保したものの、グループ学習活動として授業時間外学習を行うことを求めた。また、期末課題である個人レポート作成のための文献収集・講読などにも、授業外学習の時間を一定程度要したはずである。

しかし、前述したように、本授業の内容と受講者の関心にはやや齟齬があった。毎授業の配布資料には、授業で言及した文献情報を記載し、授業時間外での自主学習に向けた水路づけを行っていた。授業者は、自主学習の成果がプログラム開発に反映されることを期待していた。文献情報をどう受け止め、いかに自主学習につなげていくかは、個々の受講者の学習意欲と学習態度に委ねるほかない。そうした状況下で、上記の齟齬によってか、授業者が紹介した文献等はプログラム開発にあまり活用されず、多くの受講者は『学習指導要領』や『キャリア教育の手引き』のみに

依拠する傾向が強かった。全体的に学校教育を想定した具体的なプログラムが構想され、教育課程や各種答申等との関連を意識した発表や個人レポートが多かったため、受講者の成績自体は良好であった。しかし、追加文献を積極的に活用してプログラム内容をより深く、多角的に検討できるよう、授業時間外学習の指導を行っていく必要がある。

#### 4. 総括

これまで中等教育の調査研究に携ってきた授業者は、小学校教育に強い関心がある、グループ活動を好むなどの受講者の学習意識に戸惑うことがあった。しかし、学校教育全体のなかでいかにキャリア教育の理念や機能を位置づけてとらえていくかという問題は、キャリア＝進路・就職のことと安易に矮小化されがちな中等教育を事例にするより、小学校教育での実践を参照しながら考えたほうがより核心に近づくのではないかと発想を転換できた点では、非常に有意義であった。この気づきを教育研究活動に積極的に還元していくことで、引き続きFD活動に努めたい。

#### アンケート自由記述（抜粋）

- 2回生には、指導案作りがなれていない部分もあり、ハードルが高かったのかも・・・
- キャリア形成やキャリア教育について、全く違う新しい考え方を知ることができたと思います。これからキャリア教育について触れる機会も増えると思うので、様々な意見を聞いてみたいです。
- 他の自治体や諸外国のキャリア教育の実践も知ることができたらいいと思います。また、コメントシートへのコメント時間ももう少し短くすると、授業を焦らなくてよいかと思います。
- キャリア教育プランを考えることで、より具体的に議論しあうことができました。教育実習のなかでもキャリア教育に着目してみたいと思いました。
- 通常の授業でも隣と話し合ったり、班活動をしたりする時間が欲しかったです。
- キャリア教育について深い意識を持ったことがありませんでしたが、興味を持ち始めました。学校と社会の接続について、認識を深めたいです。興味をもてる充実した授業でした！